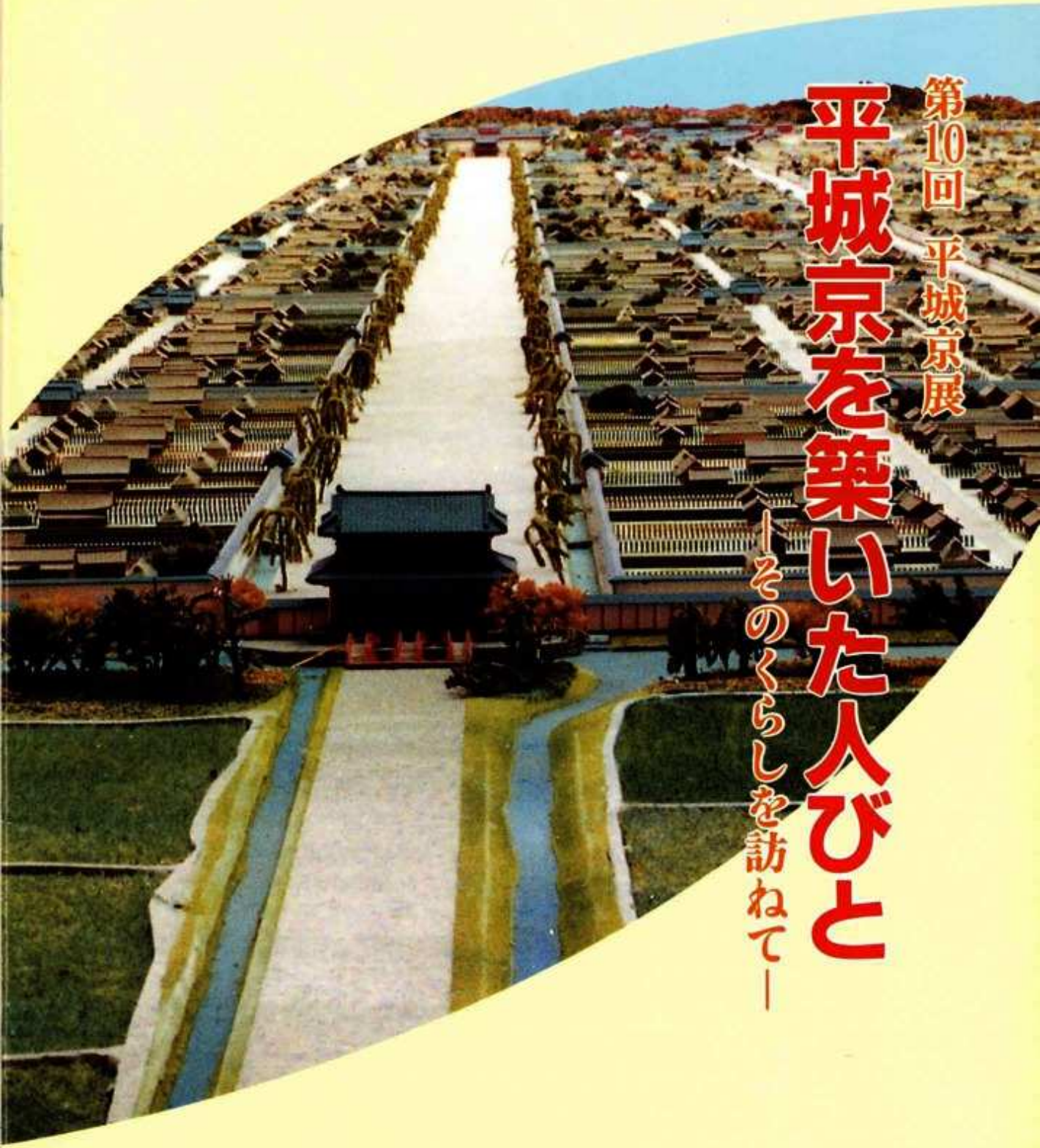


第10回平城京展

平城京を築いた人びと

―そのくらしを訪ねて―

1992

奈良市教育委員会

開催のご挨拶

昭和58年から当教育委員会が開催いたしております『平城京展』も、本年で第10回を迎えることになりました。

この間、平城京内の調査では、先年の長屋王邸宅など歴史上著名な人びとの豪華なくらしぶりや、右京八条一坊の職人町を始めとする庶民の生活が次々と明らかにされています。また平城京外でも、古代の製鉄コンビナートと評された京都府弥栄町遠所遺跡の発見など、奈良時代の調査研究の進展には驚くべきものがあります。

そこで今回は、これらの成果を集め、平城京を内外から築き上げた人びとのくらしぶりに焦点をあて、『平城京を築いた人びと－そのくらしを訪ねて－』を開催いたします。この機会に、平城京の時代にくらす人びとの生活を実感していただければ幸いです。

終わりに、本展の開催にあたり、絶大な御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成４年11月
奈良市教育委員会
教育長　　久保田　正一

例　　言

1．この冊子は平成４年11月19日から11月29日まで開催の「第10回平城京展　平城京を築いた人びと　－そのくらしを訪ねて－」の展示パンフレットとして作成しました。

2．本展の展示にあたり、下記の機関ならびに方々に御協力をいただきました。記して感謝いたします。

奈良国立文化財研究所　国立歴史民俗博物館　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　滋賀県教育委員会　宇山市教育委員会　高槻市教育委員会　京都市考古資料館　大山崎町教育委員会　市原市教育委員会　名張市遺跡調査会　(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター　(財) 京都市埋蔵文化財研究所　(財)滋賀県埋蔵文化財センター　(財)千葉県文化財センター　(財)茨城県教育財団　(財) 山武郡市文化財センター　大和郡山市観光協会　(有)アートエム　(株) 第二アートセンター　(株) 京都科学

森川昌和 (若狭考古学研究会)　早川和子　　(順不同　敬称略)

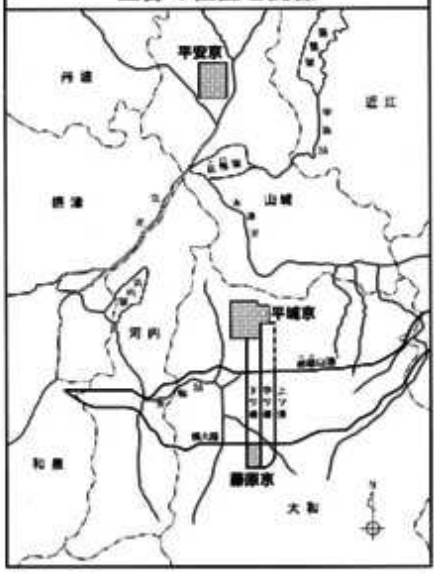
3．パンフレットの執筆および編集は、奈良市埋蔵文化財調査センターの職員で分担して行いました。

都に暮らす

藤原京(694～710)、平城京(710～784)、平安京(794～1869)は、小さな集落が点在していた平野に忽然と現れた整然と区画された都市です。中国の制度にならって採用された律令制を中心とする新しい支配体制は、支配者層とそれを支える人びととを明確に区別するものであり、それを目に見える形で表わす上で新しい都造りが必要となったのです。

こうした政治的意図をもってつくられた最初の都が藤原京です。やがて、律令制の完成とともに平城京がつくられました。そして平安京は律令制の崩壊とともに古代都市の性格を失い、商工業を中心とする中世都市へと変わっていきます。

三都の位置と関係



平城京貴族のくらし

◀ 長屋王邸の発見 ▶

奈良そごう百貨店を建設する際の発掘調査で、この地が四町(約6万㎡)もの広大な敷地をもつ邸宅跡であることがわかり、畳220枚分もある巨大な建物や5万点にも達する木簡などが見つかりました。そして、その中に「長屋皇宮」「長屋親王」と書かれた木簡があったことから、この地が長屋王の邸宅跡であることが明らかになったのです。これまでの発掘調査では、歴史上の人物の邸宅が特定されたことはありませんでしたが、これらの木簡の出土により、初めて邸の主の名が明らかになりました。

▲ 長屋王邸正殿跡

▲ 庭園の宴

▼ 建物調度再現

▲ 左京三条二坊邸宅復元模型

貴族の生活は庶民に比べ、あらゆる面で優遇されていました。彼らとその一族は、一町あるいはそれ以上の数町にも及ぶ広大な敷地に住み、華やかな生活を送っていました。

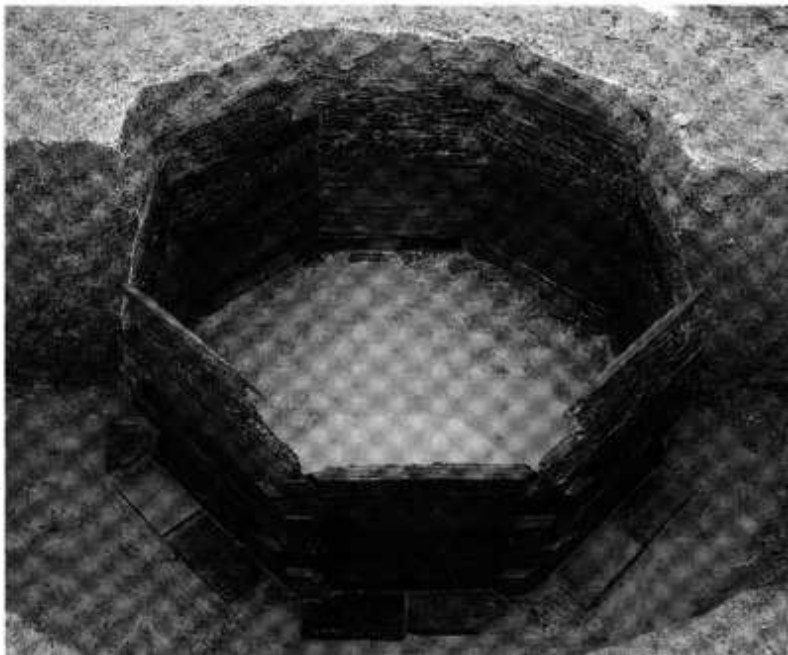
「万葉集」にもうたわれたそのくらしぶりは、長屋王邸や左京三条二坊宮跡庭園の発掘調査からも窺うことができます。

このような優雅な生活を送った貴族は、10万人ともいわれる平城京の住民のなかで、わずか百数十人ほどでした。

▲ 左京五条二坊の邸宅跡

▲ 左京四条二坊の邸宅跡

八角井戸 ▶

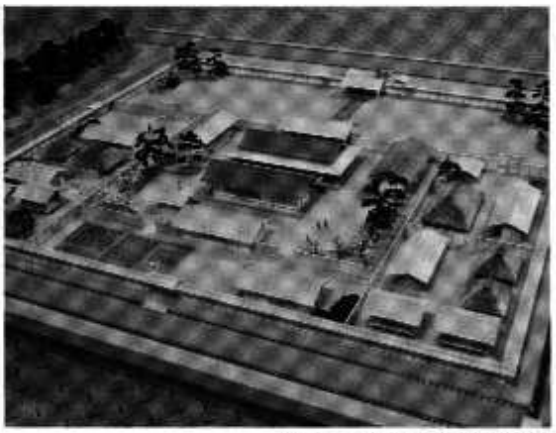


藤原京貴族のくらし

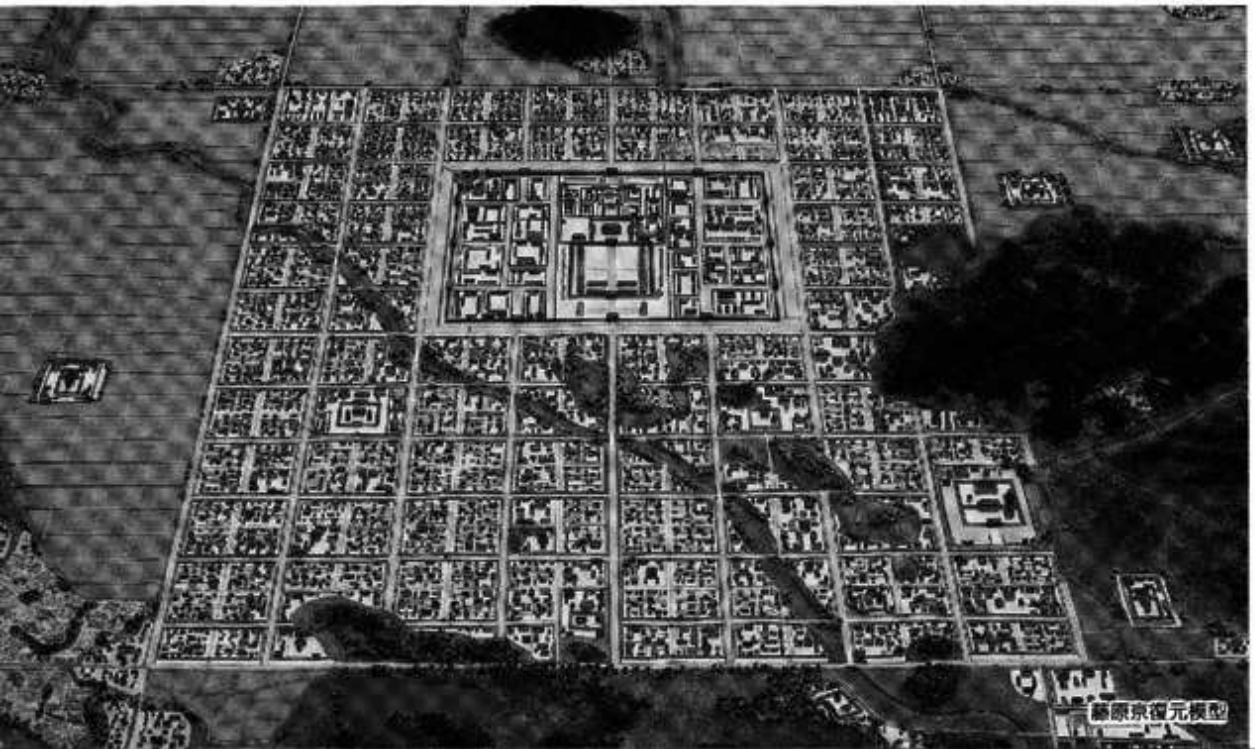
藤原京は694年(持統８)、大和三山に囲まれた地に築かれた新しい形の都でした。初めて壮大な瓦葺きの宮殿が造られるなど、日本最初の本格的な都の景観を形づくり、後の平城京の都造りの基礎を築きました。

都の人口は約２万人。そのうちの一握りの貴族が広大な邸宅で優雅な生活を送っていました。この当時すでに、米の飯とおかずという食事様式は定着していました。時には宴会も開かれ、白米や山海の珍味が貴族の食膳をにぎわしたことでしょう。

▲ 右京七条一坊の邸宅跡



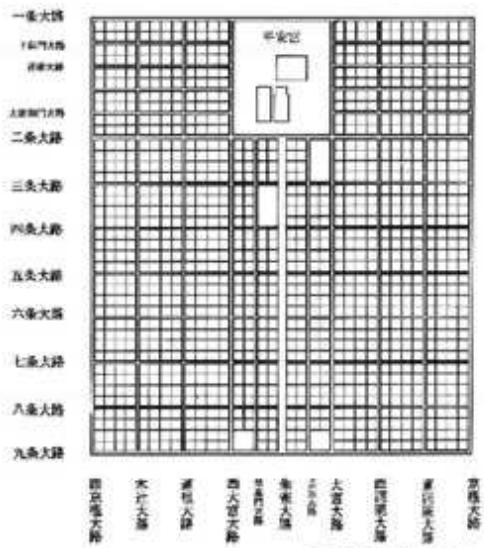
▲ 右京七条一坊邸宅復元模型



平安京貴族のくらし

平安京に都が移された最初の頃には、高級な貴族でも邸宅の敷地は一町を限度とされていました。しかし、平安京がもっとも栄え、都の人口が15万人にも達した10世紀頃には、二町、四町といった敷地をもつ邸宅が、左京に築かれるようになります。

このころ貴族たちは、「国風文化」と称される独自の雅の世界を築き上げ、「寝殿造」と呼ばれる邸宅様式や、多彩な年中行事を完成させ、ますます華やかさを増していくようになります。



▲ 平安京条坊復元図

▼ 平安京出土の緑釉

▲ 右京六条一坊の邸宅跡

▼ 右京六条一坊邸宅復元模型

都への道

律令制下の税には、租・庸・調などがありました。このうち調や庸は、各地で生産した物品を、税負担者自らの手で都まで運びました。

古代の官道や、木津川などの水路によって運ばれた税の動きは、物品に付けられた木簡を探ることによって知ることができます。この税の動きとはすなわち、当時の人びとの動きでもあり、地方の村々と、多くの人びとによって支えられた都をつなぐ「道」を示してもいるのです。

つくる

▲ 製塩実験

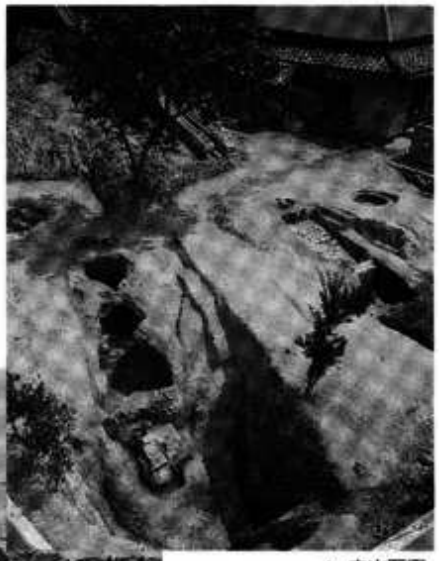
瓦工房

平城宮や京の寺院・官庁・邸宅などに葺かれた瓦は、平城宮の北方、奈良山丘陵の政府直営の工房でつくられました。これまでに8箇所の瓦窯跡が見つかっていますが、丘陵の西から東へと、時期が新しくなるにつれ位置が移っていきます。

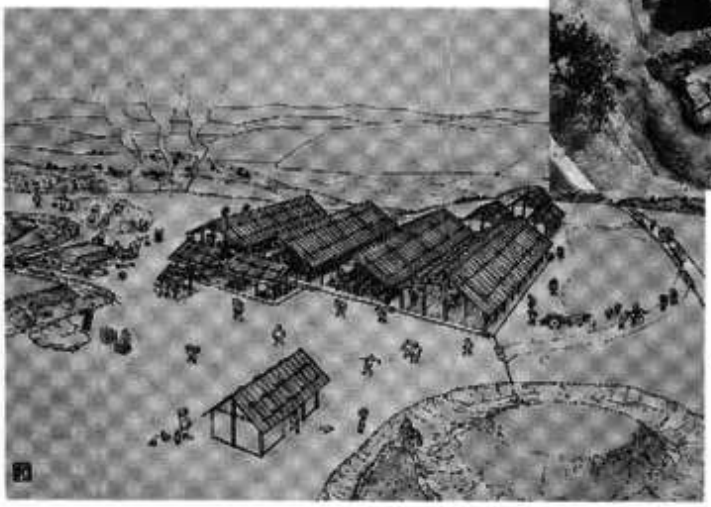
また、京都府木津町の丘陵に位置する上人ヶ平遺跡では、市坂瓦窯跡で焼き上げた瓦をつくっていた工房跡が発見されました。工房には、瓦の粘土を採るための採掘坑、瓦の生地を作る土打ち場、瓦を形づくる作業所、南北に4棟連なる大規模な乾燥場がありました。

塩

岩塩を産出しない日本では、縄文時代以来、海水から塩をつくってきました。塩をつくるには、まず海水を濃縮して濃い塩水をとり、これを土器で煮つめて粗塩を取り出し、さらにもう一度土器に詰めて焼きあげると水分が完全に抜けた精製塩ができます。そしてこの塩を土器に入れたままの状態で税として都へ運んだのです。奈良時代の塩の生産地には若狭(福井県)をはじめとして筑前(福岡県)、周防(山口県)、伊予(愛媛県)、讃岐(香川県)などが知られています。



▲ 中山瓦窯



◀ 上人ヶ平遺跡の工房再現

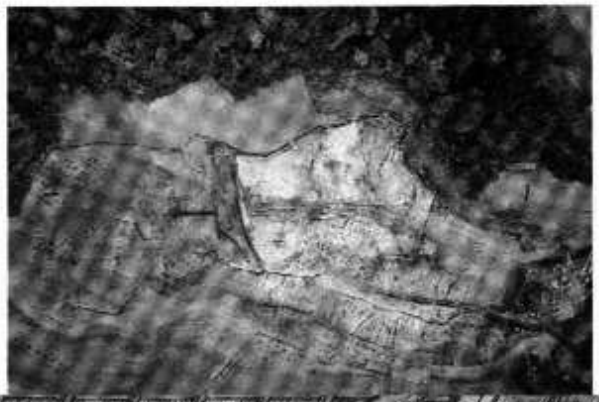
鉄

奈良時代には、美作(岡山県)、備前(岡山県)、備後(広島県)などから素材の鉄板や製品の形で税として都に運ばれていたようです。鉄をつくるには、まず原料となる鉄鉱石や砂鉄を炉で溶かして不純物を取り除き材料の地金を作ります。そしてこの地金を熱して打ち延ばし、製品に仕上げていくのです。

近年、京都府北部の弥栄町遠所遺跡で、6～8世紀に鉄を生産していた工房跡が発掘されました。ここでは製鉄から製品づくりまで鉄生産の一連の行程がわかる遺構がみつかっています。

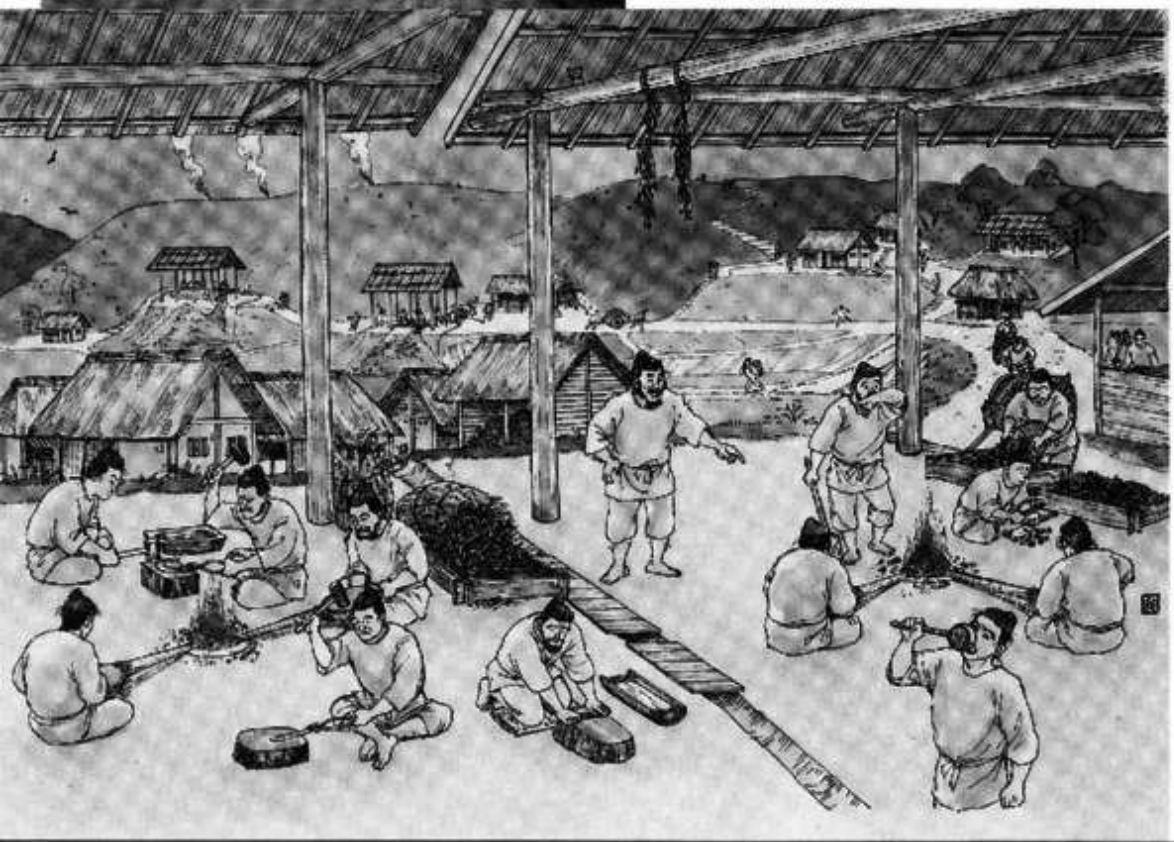
▲ 遠所遺跡製鉄炉

▲ 遠所遺跡工房跡



◀ 遠所遺跡全景

▼ 製鉄工房再現



はこぶ

都にくらす人びとが使った土師器や須恵器も税として納められたもののひとつです。

土師器は都に近い大和(奈良県)や河内(大阪府)から、須恵器は和泉(大阪府)や都から遠く離れた備前(岡山県)・美濃(岐阜県)・尾張(愛知県)などから納められていました。また、これ以外の地方の土器も見つかることがあります。これらは税として納められた漆や塩などの運搬容器として、産地から都へ運ばれた土器と考えられます。

▲ 土器を納めた国

▲ 大和の土器

▲ 播磨の土器

▲ 美濃の土器

▲ 尾張の土器

都ではたらく

漆工房

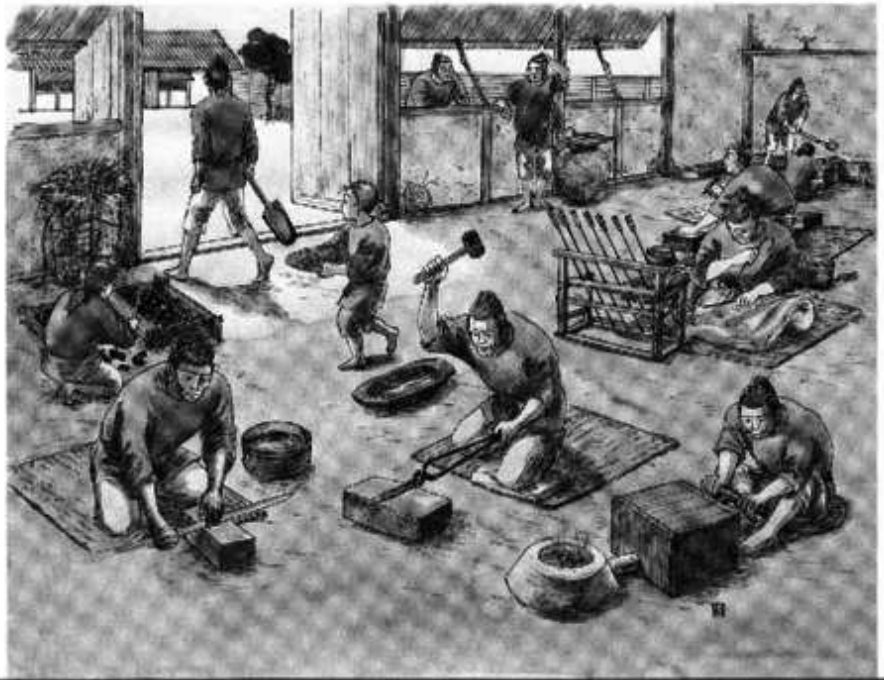
右京八条一坊十三・十四坪の発掘調査で、漆がこびりついた須恵器の壺や容器の栓などがたくさん出土し、漆工房跡があったことがわかりました。漆は、丹後(京都府)、若狭(福井県)、越前(福井県)、能登(石川県)などの国から税として都に運ばれました。産地で採取された漆液は、須恵器の壺などに入れて運ばれていたようで、右京八条一坊の調査で多量に見つかった漆の付いた壺は、運搬に利用されたものだったと考えられています。

▲ 漆工房の道具

鋳造と鍛冶

奈良時代の金属製品の製作は、鋳造を典鋳司、鍛冶を鍛冶司が管轄して行っていました。鋳造は、金属を溶かし鋳型に流し込んで製品を作ります。右京八条一坊十四坪の調査では、坩堝やふいご羽口、銅未製品、銅滓などが多量に見つかり、銅製品を鋳造する官営工房があったと考えられています。

一方、鍛冶は金属を打ち延ばして製品を作ります。鉄を用いて武器や農工具を作っていました。現在でも刀鍛冶などにその姿を見ることができます。



◀ 工房再現

里に生きる

▲ 畿内の農村

奈良時代の日本の人口は約600万人と推定されています。このうち都にくらす人は10万人ほど。残りの多くの人びとは農村に住み、古墳時代とあまり変わらないくらしを送っていました。

畿内を中心とする西日本の集落では、奈良時代にはほぼ掘立柱建物へと住居の形態を変え、平城京内の住居と規模こそ違え、同じ構造の建物にくらしていました。

一方、関東を中心とする東国では、奈良時代を通して竪穴式住居が残り、一部の掘立柱建物と並存しながら村を構成していました。

▲ 村上遺跡復元模型

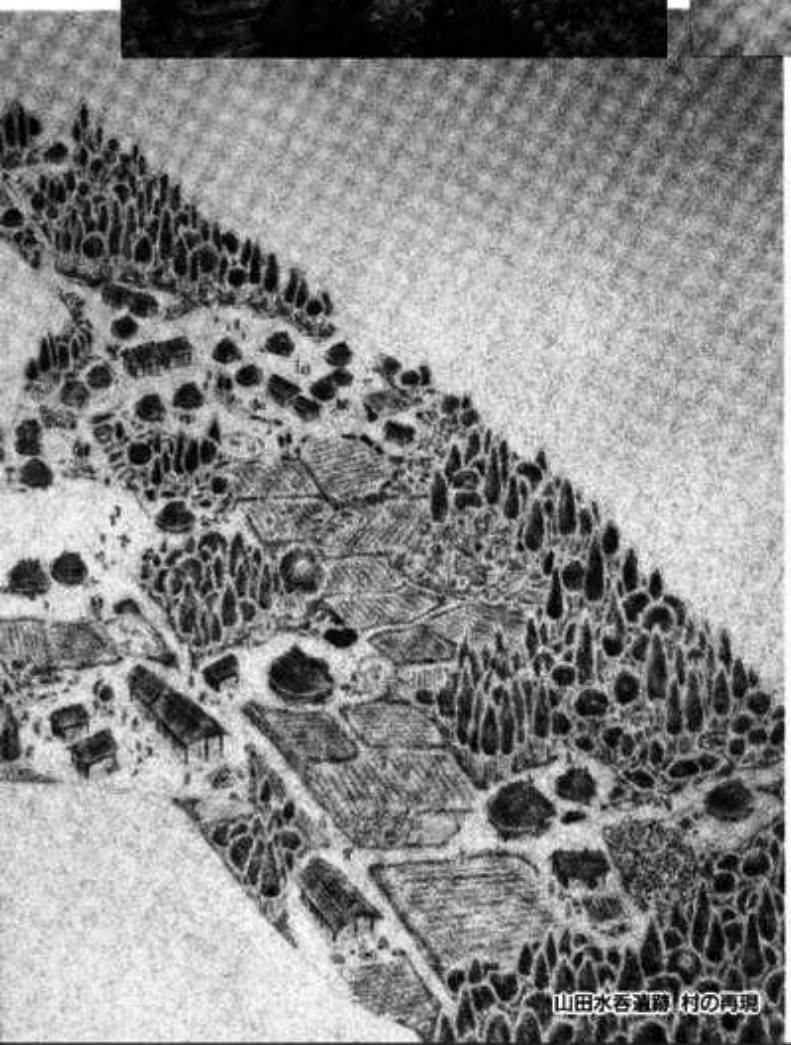
東国のくらし

都から遠くはなれた東の国では、5～10棟のグループがいくつか集まって集落をつくり、共同で水田耕作などを行っていました。

家の大半は竪穴式住居でしたが、小規模な掘立柱建物もある程度の割合で見られ、住居として、あるいはグループごとの共同倉庫として使われていました。

千葉県の山田水呑遺跡や村上遺跡・文作遺跡・大網山田台遺跡・白幡前遺跡などは、広い範囲に及ぶ調査によって、集落の規模や構造が明らかになりました。また、茨城県の鹿の子C遺跡では、多量に漆が付着した土器や鍛冶に関係する遺物などが出土し、集落内に工房があったことがわかりました。

▼ 文作遺跡　▲ 文作遺跡竪穴式住居群



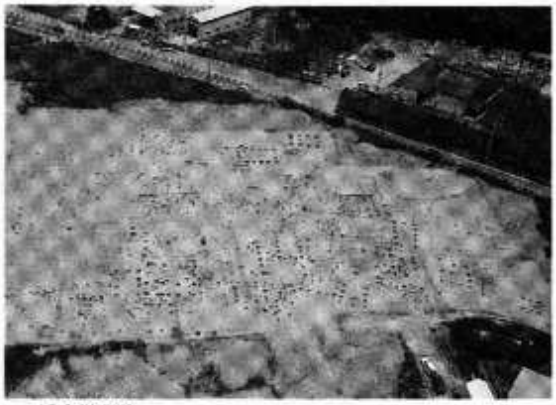
山田水呑遺跡 村の再現

▲ 大網山田台遺跡

鹿の子C遺跡 ▼

西国のくらし

畿内とその周辺の集落では、飛鳥時代からすでに掘立柱建物が庶民の住居として採用されていました。郡家今城遺跡(大阪府)、山垣遺跡(兵庫県)、鴻之巣遺跡(三重県)などの集落は、掘立柱建物だけで構成されています。一方、下之郷遺跡・服部遺跡(滋賀県)などでは、まだ竪穴式住居と掘立柱建物とが同時に使われています。これらの集落でもやがて、掘立柱建物中心の構成へと変わっていきます。また、これらの集落のうち服部遺跡や山垣遺跡、郡家今城遺跡は、地方官衙的な性格を持つと考える説もあります。



▲ 鴻之巣遺跡

山垣遺跡 ▶

郡家今城遺跡 村の再現

第10回　平城京展

平城京を築いた人びと

―そのくらしを訪ねて―

平成４年11月19日
編集・発行　奈良市教育委員会
印　　刷　関西美術印刷(株)